

A young tree with a tripod support structure stands in a grassy field under a clear blue sky. The tree has a central trunk and three diagonal supports. The leaves are green, and the sky is a solid, clear blue. The foreground is filled with lush green grass.

『暮らす』  
realclover

大学のゼミで同期だった萩原くんが二泊三日の出張で大阪に来るということで、約一年ぶりに再会した。彼は東京で東南アジアの雑貨などを輸入販売している会社に勤めている。神奈川県から実家のある大阪に戻り、京都にある大学院で森林生態学の研究を続けている自分と比べると、別に対して変わらなかった。ただ、スーツの着こなしは萩原くんの方が少し上手になったようだった。<sup>がびょう</sup>画鋏がデザインされているネクタイはどうかと思うけど。

酔っ払うと説教くさくなる萩原くんが社会人の人間関係の心得を教えてくれた。彼もまだ入社二年目なのに、新入社員がひとり同じ課に配属されてきた。「大福の奴が…」と呼んでいたけど、それが本名なのかアダ名なのか最後まで問いただせなかった。いずれにしても、その大福くんがバスケ部出身で彼よりも背が高く、顔も悪くないらしい。彼曰く、イケメンならイケメンらしく感じ悪ければいいのに、意外に良い奴だから困る、と誠に勝手な持論を展開していた。良い奴なら別に外見なんてかまわないはずなのに、それが少し気に食わないと言っていた。相変わらず細かいところを気にしすぎる性格は治っていない。そして、会話の目的地は上司の愚痴や取引先のお店の美人の店長さんへの淡い片思いなど、まるで定まらない。こんなことも話していた。

「名刺の枚数はどんどん増えるけど、ただの知り合い。たまに飲みに行くことはあっても、肩書き前提。別にそれが悪いとは思ってないけど、たまに何かこれでいいんだろうか、と思ったりすることがあるなあ」

社会人ほどではないだろうけど、研究者の業界にも同じような匂いは漂っている。肩書きや呼び名は異なれど、同僚・上司・部下・取引先にあたるような人間関係はどこにでも存在している。具体的でありながら漠然としていて、強固な部分と弾力性とが共存している、ヒトと人との関係性。彼と同じように、自分も身近な人と一定の距離を保ちながら寄り添っている。「学生時代のように簡単に友だちは作れなくなったよ」と氷が融けてしまった麦焼酎を飲みながら、彼はぼんやりと言葉にした。



週に三回、市役所で事務補助員のアルバイトをしている。今月で七ヶ月目だ。主にパソコンへのデータ入力とか、会議や報告会で使われる資料づくりのお手伝いをしている。大学院で森林に関わる研究をしていると、関係のあるNPO法人や役所、その地域の方々と会議やワークショップをすることがある。行政職員の方と接する機会が増え、その生態に興味を持つようになった。そんな背景があって、この仕事に応募してみた。

そこは日本全国に<sup>あまた</sup>数多ある地方自治体の一つすぎないものの、よく批判的に言われるようなお役人仕事は、たまに「こういうところがなあ」と思う瞬間ももちろんあるけど、いざ一緒に働いてみるとそこまで言わなくていいのに、と感じる部分もだいぶあった。定時に帰っている人もほとんど見ない。しかし、そこは個人の時間管理の問題もあるので何とも言えない。

さて、自分はいつも狙いどおりに定時になるとすんなり帰っている日がほとんどなのに、今までに二回も飲み連れて行ってもらったことがある。課長がとても気さくな人で勤務時間中もた

まに話しかけに来てくれる。少し息抜きがてらという雰囲気は感じるけど、悪い気はしない。自分と同年代の職員の方がそっけないように思う。むしろ、パートのおばちゃんたちと話していることが多い。でも、どこまで行っても、知り合い以上、友だち未満な関係性は否めない。しかし、みんな、それでそれなりに満足してしまっているのだ。

ある日、課長に声をかけられ今度の井戸端会議に出てくれないかと頼まれた。それは「K市住みよいまちづくり井戸端会議」のこと。先月も先々月も頼まれたけど、断っていた。「なかなか若い人の参加がいなくてね」と。それは名前のせいですよ、とはなかなか言えなかった。課長には遅刻を見逃してもらえている後ろめたさもあり、あまり断り続けるのも申し訳なく思ったので「分かりました」と快い感じで出席に丸をつけた。



六月二十五日に市役所別館二階会議室Cにて井戸端会議が開催された。担当者は地域づくり推進室の藤沢さんで、当日の司会進行役も兼ねていた。この藤沢さんを含めて参加者は十二名。まずは自己紹介から始まった。

「植嶋沙希です。D大学の二年生です。大学では、非営利組織の役割を学んでいます」

「下山源三です。七〇歳で普段はのんびりと畑仕事をしています。こう見えても昔は県庁の職員をしていました」

「宮津稔子としこと言います。市役所の下水道課で事務補助のアルバイトをしています。小学五年生になる息子がいます。下水道課はおじ様ばかりで、今日は私と同じように若い方もいるのでよかったです」

「宇津井哲也です。一級建築士をしています。年齢は四十一歳です」

「本里葉子です。駅前の百貨店の漬物屋でパートで働いています。見かけたら気軽に声をかけてくださいね」

「六十云歳の武田智代です。専業主婦です。趣味はテニスです」

「赤井一恵です。美しい町K推進委員会の副事務局長という偉そうな肩書きがありますが、月に二回市内のゴミ拾いをしている、お掃除好きのおばさんです」

「小西春雄、六十五歳、自転車販売店をやっています。が、経営は息子に任せて、壊れて廃棄処分されてしまう自転車を引き取っては部品を寄せ集めたオリジナル自転車を趣味で作って楽しんでます」

「環境保全課で主に企業様向けの温暖化対策の普及・啓発をしています、大川広志と言います」

「国民健康保険課の松木英美と言います」

「皆さま、ありがとうございます。お会いしたことのある方々もおられますが、初参加の皆さまにもたくさん発言して頂きたいと思っております。それでは、自己紹介とは逆周りで、最近市内で体験したことで、うれしかったこと、悲しかったこと、驚いたこと、悔しかったこと、何でもいいです。簡単にご意見をお願い致します」

井戸端会議というくらいだから、もう少し、だらだらとぐだぐだと話して終わるのかなと思いきや、藤沢さんの手慣れた司会っぷりで手際よく参加者から話を聞き出していく。そして、気になるキーワードやエピソードが発言されると、後から議論しやすいように見やすくホワイ

トボードに書き留めていく。なかなか上手なファシリテーションというやつだ。そんな藤沢さんに感心をしているうちに、自分の番が回ってきてしまった。

「そうですね」と言っ、そのあとが続かない。実のところ、今はK市に実家があるものの、K市民歴はそれほど長くはない。父親の仕事の都合で高校一年のときに引っ越してきた他所者組よそものなので、純粋な地元っ子ではない。しかも、大学は神奈川県だったから、青春時代の四年間がすっぱり抜けてしまっている。そのため、通算でも四年と少しくらいしかまだK市では暮らしていない。他の参加者の方々の温度差が出てしまいそうで申し訳ないなあ、という気持ちになる。

「岡元さん、どうですか？そんなに難しく考えなくても大丈夫ですよ。最近、何か気になることはありませんでしたか？」藤沢さんが微笑みながら、あっさりとした口調で促す。

「そうですね」と微笑み二倍返して返答しても、彼の笑っていない眼差しをごまかすことはできなかった。



課長がスッカスッカと自分の席の方に近づいてくる。この人はかかと踵を擦って歩く癖があるから、本当にそんな足音がする、スッカスッカ。

「地域づくり推進室の藤沢にはちょっと借りがあってね。まあ、ウチの課の業務に支障が出ないようにサポートはします、という条件を提示されたから断る理由もなくて。岡元くんは仕事は速いから平気だよ。『K市市民防犯対策プロジェクト推進チーム』のチームリーダー、頑張っ！」

どうして、課長の借りを自分が払わなくてはならないのか、まるでアカウントビリティ不足を感じながらも、しぶしぶと「頑張ります」と答えた。仕事にさせられてしまったら、反論することもできない。こういうのもお役人仕事って言うにちがいない。

あの時、パツと頭に浮かんだ出来事が、二カ月前に車上荒らしにあつてカーナビを盗まれた、「本当にあるんだ、そんなことが」という悲劇的なエピソードだった。車両保険の範囲内で修理が出来たから良かったものの、またやられたらかなわないと盗難防止装置を自費で付けた。中古で購入した五万キロ走行車だけど、カーナビは元々付いていて、車体メーカーの純正機器だった。現場検証に来てくれた警察官の話によると、新車で購入した際に純正を装着すると登録番号を控えられていないことが多く、狙われやすいらしい。だから、残念ながらまだ犯人は逃走中だ。「最近では組織化された犯罪グループが多く、盗難品から跡を辿るのがとても難しいのです、地域の防犯体制の向上に努めてはいますが、まずは住民お一人お一人による防犯への取組みが肝心になってくるのが現実なんです」、とも話していた。

そんな事件があったことを思いがけずに話したら、知り合いも半年前に同じような車上荒らしにあった、駅前に停めていた自転車のサドルを盗られたことがある、夜中の十二時を過ぎてもコンビニの駐車場にたむろしている高校生がいる、息子のクラスの女の子が塾の帰りに変なおじさんに声をかけられたことがある、などなどK市はゴッサムシティみたいだと余計な妄想を膨らませてしまった。市役所の屋上からコウモリマークのスポットライトを夜空めがけて放ったら、黒いマントの男が颯爽と現れてくれるのではないだろうか。何気に試してみたい気がする。

「それはどれも心配な話ですね。明日はわが身と言いますが、いつ自分に災難が降りかかってくるか分からない時代です。私も一市民として、見て見ぬふり、ではなく聞いて聞かぬふりはできません。どうでしょう？本日の井戸端会議ではとても何らかの結論や方向性を見つけることは難しいと思います。そこで市内の防犯に特化したプロジェクトチームを作ってみては如何でしょうか？」

藤沢さんの提案に対して、参加者の間からも自分たちが住んでいる町の防犯について深く話し合っていきたい、という雰囲気が出始めていた。特別な狙いがあつて話したことではなかったのに、言い出しっぺとして意見を言うべきかどうか迷っていると、

「では、岡元さんにプロジェクトのチームリーダーをお願いしてもよろしいですか」と藤沢さんが、参加者に同意を求め始めた、本人の了解なしに。すいません、バットマンはちょっと。個人的にはスパイダーマンが好みですが。なんて、妄想に浸っている場合ではなかった。全員の[お前やれよ]光線が自分に注がれている。

「確かに誰かがまとめ役をするのがいいですね」

「そしたら、やっぱり発案者の岡元さんが適任だな」

大いなる力ではなく、大いなる発言には大いなる責任が伴うということだろうか。しかし、今度ばかりはニッコリ微笑んで、「そうですね」とは簡単に言えない感じだ。地域の防犯なんて全くどうすればいいのか分からない。

「もちろん、岡元さん、お一人にお任せするようなことはいたしません。地域づくり推進室としてもしっかりサポートします。ご心配なさらずに。そこで一つ提案ですが、岡元さんは今、産業振興課の事務補助アルバイトですよ。あそこの課長とは面識があって、業務の一環として携わってもらえるように説得してみますよ。その了解が取ればお願いできますか？」

なるほど、仕事にされたら断れなくなってしまう。もしや、最初から課長もグルなのか。これはシナリオ通りの展開なのか。知らないのは自分だけか。なんて恐ろしい市役所だ。こうして引越してきてから九年、やっと自分の住んでいる町に真正面から向き合うことになってしまった。



防犯といえば警察の仕事、というわけで市内の防犯を担当している市警の生活安全課に行ってみることにした（と、いうよりは勝手にセッティングされていた）。ここ三ヶ月間の犯罪データを見せてもらう。そのうちの一件が自分とは悲しいかぎり。

車上荒らしは街頭犯罪とも言うそうで、自転車やオートバイの盗難、ひったくりなどと同じ括りらしい。特にK市では最近、自転車のカゴに乗せている荷物をひったくられるケースが目立って発生していることがわかった。ハンドルにバッグの肩紐などを引っ掛けておけば大丈夫ではないかと素人的に考えてしまうが、あれはひったくられた際に転倒して事故に合う危険が高くなるので、やめて欲しいということだった。そういえば、自転車屋の小西春雄さんもカゴに取り付ける防犯カバーが昔に比べてよく売れると話していた。そう言われると、駅前の自転車置き場では、ブルーのカバーを取り付けた自転車をよく見かける。

「市民の皆さまが防犯に対する意識を持って頂けることは、警察としてもとても嬉しく思います。しかし、無理な行動は時として自らを危険におちい陥れることにもなりかねません。もし被害に直接合われたり、目撃したとしても犯人を無理に追いかけてりしないようお願いしています」ハイ、よく分かりました。

やはり自分にはとても荷が重い仕事のように思う。こんなことは事務補助員としてのアルバイトの範疇を超えている。警察で聞いた話の報告と今後の方針（自分の気持ち！）を伝えるべく、藤沢さんの元へ行く。鞆の中に入れたままになっている北野天満宮の開運祈願のお守りを握り締め、今度はうまく言い包められないようにしようと心の中で適当な呪文を呟く。

「岡元さん、行政職員の役割って何だと思いますか？実は昨年から社会人として大学院の修士課程に改めて通っています。公共政策を学び直そうと思って通い始めました。市役所に勤め始めて十二年目になります。もう一度、いや、初めてかもしれませんが、公共っていうものに向かい合ってみようと思いました。まだ、はっきりと自分の中で結論付けていることはありませんが、

国であれ、県であれ、市町村であれ、制度や事業は見た目が優れているだけでは不十分だと感じています。それが機能するかどうかは、中身の問題だけではないんです。どんな想いで誰がどのように関わって作ったのかが大事だと思うようになっていきます。白状すると、自分の仮定に岡元さん含めて、皆さんを巻き込んで検証ないしは実験をさせて頂いているのかもしれませんが。他の方にはこんなこと内緒にしといてくださいね」

今後の方針を報告させてもらう前に藤沢さんからこんな話を聞かされた。また先手を取られてしまった。もしかすると、自分の情けない切羽詰った表情からこれから話そうとしたことをサトラレてしまったのだろうか。

そんな、藤沢さんの机の上には、図書館から借りてきたらしい防犯や防災に関する本が四冊積み上げられていた。



先日の井戸端会議に参加して以来、出勤日が同じになると宮津稔子さんから昼食のお誘いを受けられるようになった。お誘いと言っても市役所の食堂だけだ。しかし、この食堂がなかなか<sup>あなど</sup>侮れない。特にうどん。元から好きではあるけど、ここの麺と汁は平均点以上を叩き出し、さらにかき揚げが美味しい。カリッと大きく具沢山。これで三五〇円、いなり寿司（二個）を付けても四二〇円。

そんなメニューの話ではなく、おしゃべりな人について考えたい。彼ら彼女たちの特性として、口が軽いとか、人の話を聞かないとか、歩くのも早いとか、声色が高いとか、話題がコロコロ変わるとか、色々と思いつくけど、おせっかいという特徴も併せ持っているのではないかという仮説を立て、昔から観察を続けている。例外はもちろんあると思うけど、自分の周りでも、よく喋る人を思い浮かべると、おせっかいなり、世話好きなり、他人のことに口を出す、あるいは黙っていられない人が多い。ただ、そのおせっかいも、本人の興味関心から来るのか、相手のことを思っていることなのかで、受け取る印象はまるで違う。

さて、宮津さんとは言う、彼女はいるの？どんなタイプの女の子が好きなの？初めてのデートはどこに連れて行くの？とほとんど初対面にもかかわらず、ほとんど遠慮もしていない感じで聞いてくる。遠慮さがないうえに質問にスピード感があるので、答える側はついついペースを乱されて、「ハイ、それは…」なんて答えてしまっている。親戚にはいて欲しくないお婆さんだ。もし、〔理想のアパート大家さんランキング〕なんてものがあつたら、おそらく彼女には投票はしないと思う。しかしながら、人に嫌われる性格かと言われると全面的に「イエス」とは返せず、むしろ圧倒感と愛嬌が絶妙のバランスで成り立っているような人である。なぜか。おしゃべりさんにありがちな早口さがあまりないからかもしれない。

「沙希ちゃんを食事に誘ったけど、断られちゃったんだってね」

どこで誰に聞いたんですかと問い詰めようとしたが、そういえば植嶋さん、口軽そうだったな、と思い至る。たまたま、好きなラーメン屋が同じで、それなら一緒に行こうか、くらいの軽い成り行きの会話をしただけなのに。その返事だって、「考えときます（ニコツと）」。まだ断れたわけじゃない。

「そんなに落ち込まないでも平気よ。だって、沙希ちゃんにはアメフトしている彼氏がいるんだ

から。岡元君みたいな文科系はタイプではないような気がするな」なんだ、彼氏がいたのか。優しく断ってくれていたのか。年下の女の子に気を使われるなんて。そりゃ、アメフター相手には特殊能力がないと勝てそうにない。それにしても、宮津さんはジェームス・ボンドにも引けを取らない情報収集能力の持ち主だ。

「そうそう、松木さんは？年上は苦手？二十八歳だったかな。彼女、ちょっと大人しくて癖がありそうけど美人だよな」

ひとつ前のコメントに反論をする余地も与えてくれない。仕方なく、しずかにうどんを食べる。そして、いらぬことばかり考えてしまう。例えば、どんな特殊能力が欲しいとか。

「そういえば松木さん、この前、下山さんの畑仕事の手伝いに行ったみたいよ。最近の若い女の子は、意外と農業とかに興味があるみたいね。岡元くんも、里山だっけ？自然が好きなんだから、きっと話しがあうわよ。二人で下山さんの畑の草むしりのお手伝いしに行ったら？」

アメフターならば、きっとパワーと瞬発力がすごいあるだろうから、高いジャンプ力と遠隔でも攻撃できる特殊能力が必要だと思う。

「ねえ、ちゃんと聞いている？」



本日は土曜日、普段なら昼まで寝ているところだけど、今の時間はなんと午前八時十五分。早起きも悪くはないなど、ベランダに出て朝の陽射しと新鮮な空気を体いっぱいを受け止める。これが人間としての正しい一日のはじまりだと感じる。番つがいの小鳥たちが左から右に飛んでいく。穏やかに手なんて振ってしまう。

ガラガラと背後から怪しい影が姿をあらわす。洗濯物を干そうとベランダに乗り込んできた母親が大げさに驚く。そして暇なら洗濯物を干しといて、と洗い立てで山盛りの洗濯カゴを押し付けていく。「いや、暇じゃないよ」という声をかき消すかのごとく、「あー忙しい忙しい」とぶつくさ言いながら消えていった。日常という攻撃で大きなダメージを受ける。

今日は赤井一恵さんが副事務局長として関わっている、町のゴミ拾い活動に参加するために早起きをしたのだ。そんなことを母親に言えば、さらに驚くにちがいない。もしかしたら感動して涙を落とすかもしれない。そんなことより、町のゴミ拾いの前にアンタの部屋の中のゴミ拾いをしなさい、と文句を言われて終わりだ。

二丁目公園に午前九時半を三十秒前に到着すると、既に参加者は全員集まっていた。その中に、下山源三さんと武田智代さんを見つけた。朝の挨拶、開口一番、「沙希ちゃんは来ていなくて残念だね」。「本当に残念ですよ」と何食わぬ顔で話を合わせる。もしかして、自分だけ仲間はずれにされて、みんなでグーグルグループでも作っているのだろうか。これはもしかすると、大掛かりなドッキリか、あるいはトゥルーマンショーか。足元に落とし穴があるかもしれない、どこかで隠し撮りをされているかもしれない。慎重に行動をしなくては。

赤井さんの号令で参加者が公園の真ん中に集まる。各自にゴミ袋と軍手が手渡されて、集めるゴミの種類ごとに班分けがされる。「それでは、十一時にまたここに戻ってきてください」と告げられ、解散。副事務局長なんて肩書きなのに、赤井さんにはまるで押し付けがましいところがない。もっと、こんな社会的な活動をしている人は、正義感が丸出しで熱烈な市民運動家だと思っていたのに。

「今日は参加してくれて、ありがとうね。ほらっ、小さいお子さんはご両親と一緒に来てくれるけど、もう中学生以上になると、ほとんど来てくれなくなってね。今度は沙希ちゃんと松木さんも誘ってまた参加してね」

「そうですね、誘ってみますよ」と最大限の明るい笑顔で返事した。下手なことは言えない、盗聴をされているかもしれない。

作業を終えてから感想を聞かれて、「自分の住んでいる町がきれいになることは気持ちがいいですね」なんて無難な答え方しかできなかった。そして、これは口にはしなかったけど、集まってきた人たちがゴミ拾いをするために来ているのか、それともおしゃべりをしに来ているのかどっちなのだろうと思った。黙々と「ゴミを拾うぞ、コノヤロー」みたいな人はおらず、ゴミ拾いは後付けみたいな気がした。真面目なことを真面目にしようとするのは意外と難しく、徐々に退屈になってくる。そして、いつしか人はそれをしなくなる。もうゴミ拾いが第一の目的になっていない人もいるのかもしれないけど、それでも来てしまうってことは楽しいからなのだろう。自分の楽しみを近所の人と共有できれば、自分だけのことではないことへも関わっていけ

るんだ、と何となく感じた一日だった。



昨日、駅前の百貨店に行った。母親からの頼みで三千円程度の菓子折りを買いに行かされた。地下一階にはギフトスペースと食料品売り場が併設されている。ふと、ここの漬物屋で本里葉子さんが働いていることを思い出す。知り合いとか友達とか会社の人とか、大体この人とはこういう関係と無意識に自分の中で決めてしまっている。そして、その人ごとに会う場所や会う時間帯や会うきっかけなども自然と認識されている。だから、想定内の出会い方には違和感がないのに、あるべからざる場所で会うと何故か気恥ずかしく、普段どおりには接しにくい。例えば、遊園地でばったり出くわしてしまうとか。向こうが気付かなければ、<sup>きびす</sup>踵を返して来た道に戻るか、携帯をいじるフリをするか、まったく知らんぷりをするか、自分から声をかけるのを<sup>はばか</sup>憚られる気分になる。そんなウジウジした性格なので、そういえば的に思い出して会いに行ってみるなんて、そうそうない。すり足で店に近づくと、本里さんはちょうど接客中だった。ここでまた一瞬迷うも、意を決して飛び込んでみた。もちろん、接客が終わってから。

「あなた、この前のときの自己紹介で大学名を言わなかったでしょ。どうしてなの？」

と、先日の井戸端会議の話になった。そうだったろうか、きちんと憶えていない。

「ああいう場で自分の職業とか会社名とか言うのって抵抗ある人が多いじゃない。でも、知らない相手だからこそ、まずは自分が何者なのかを伝えることが大切だと思わない？そうすると、ほらっ、こうしてお店を訪ねてくれる。新しい人の輪なんて、そんなことから始まるのよ。この間も松木さんがふらっと来てくれたのよ。隣の市に住んでいるからウチよりも大きな百貨店があるっていうのに。冷たい感じのする子だと思っていたからビックリしたわよ」

市役所が主催した井戸端会議という市民の集まりで知り合った人々の輪。その会議が発展して、市内の防犯について話し合う場が変わろうとしている。だからと言って、別に防犯のことだけを話していればいいと言うものでもない気がした。むしろ、防犯以外のことを色々と話すことが、結果的に防犯に結びつくのかもしれない。集まることのきっかけになったことなんて、たかだか初めの一步なのだ。

そして、何も買う気はなかったのに気付いたら柴漬けを手にしていた。「割引はできないけど、少し多めに入れといてあげたわよ」と。彼女が人をその気にさせる恐ろしい話術の持ち主であることもわかった。



七月二十六日、「第一回K市市民防犯対策プロジェクト推進会議」が開催された。どうしても行政というところでは、お堅いネーミングになってしまうらしい。小学校が夏休みに入っている時期でもあり、宮津家ではプールに遊びに行く予定を前から決めていたということで、宮津稔子さんはお休みだった。また、宇津井哲也さんは市内で請け負っているリフォームのお宅の仕事が佳境に入っていることでご欠席。今年は梅雨が梅雨らしい感じでジトジト雨が多い日が続き、作

業が遅れてしまっていたようだ。

今回は自己紹介もなく、さっそく話し合いが始まった。まずはチームリーダーとして、一ヶ月間の活動報告をさせてもらった。唯一の有給スタッフのような扱いでもあるし。昨晚、今日の会議に向けて簡単に資料を作ろうと思って作業を始めると、A四用紙で五枚にもなってしまった。

「岡元さん、しっかりとまとめられた資料をありがとうございます。みなさん、どうでしょうか、何かご質問やご意見はありますか？」

何人かから手があがり、気になる箇所について言及がなされる。それを藤沢さんがフムフムと聞きながら時に合いの手を打ったり、発言の真意を確認したりしながら、ホワイトボードに前回のようによくまとめていく。また、特別に宿題が出ていたわけではないのに、他の都道府県で実際に行われている事例を調べてくれていたり、家族や友人から意見を聞いてくれていたり、K市特有と思われる課題を洗い出してくれていたりなど、なんだよ、みんな、やることやってるじゃん、と若輩者が上から目線で失礼いたしますが、そんな発言を聞きながら良いチームだ、オーシャンズ××にだって引けを取らないと思った。

「こうして書き出してみると、個人レベルでできることと、ある程度の規模や組織にならないと効果を発揮しないに分かれますね」とは大川広志さんの言葉。

「さて、どっから手を付けていくか」と小西春雄さん。

場に沈黙の雲が落ちる。しかし、よくある会議で見られるような、皆が下を向いて「誰かなんか言ってよ」という重く黒い雲ではなかった。その視線はホワイトボードに注がれている。みんなが白くて大きな入道雲の隙間から青空を見つけようとしている。

最初の出会ってから今日までの約一ヶ月間は、直線的には早かったけど面的には広がった気がする。一生ものの人付き合いのはじまりなんて、こんなものなんだきつと。市役所のサポートは受けてはいても、たかだか市民十二名が、約八万人が住んでいる町の防犯に対して、いったい何ができるのだろうか。どこまで、どんな成果を出せるのか全くわからない。わからないが、それでもやれるところまでは続けてみようかな、と少し前向きに思えるようになった。誰かが発言した、夏祭りと防災訓練をドッキング企画、と書かれた文字を見ながら、そんなことを考えていた。



畑の上ではどことなく和らいだ気持ちになる。森林の中にいるときとはまた違う自然の一部感が自分を包んでいる。宮津稔子さんの誘いで下山源三さんの畑仕事の手伝いに借り出された。息子さんとその友だち二人と、そして松木英美さん。

「なんだ、帽子持ってきてないのか」

「いや、タオルを頭に巻けばいいかなと思って」

「それだけじゃ熱射病になってしまうぞ。麦わら帽子かなんかあったはずだから、ちょっと待ってな」

真夏の太陽が意地悪をするような太陽光線を放っている畑の真ん中で、少年たちも最初は競うように雑草を抜いていたのに、バッタやらカマキリやらを見つけると作業そっちのけで遊びはじ

める。で、勢い余って<sup>うね</sup>畝に乗っかかりると、下山さんの大声が飛ぶ。そんな光景がちよっと微笑ましかったりしてしまう。母親稔子の姿が見えない、と思って辺りを見回すと納屋のそばの木陰で休んで冷えた麦茶なんか飲んでいる。まったく、あなたから誘ってきたんですよ。松木さんときたら、それこそ黙々と黙って作業に没頭している。時折り、下山さんに話しかけては頷いたり感心したりしているご様子。本当に農業に興味があるんだ。スーツ姿しか見たことがなかったから、今日みたいなラフな格好は新鮮に映る。今日なら一緒に並んで歩くと、同じ歳に見えそうだ。

「ねえ、なんか話しかけに行ってくれば」と麦茶おばさんが突っついてくる。自分ばかり飲んでないで、みんなの分も持ってきてよ、と少し日陰に避難しながら思う。畑に目を遣ると、彼女は男の子たちと楽しそうにしている。どうもあの輪の中には入りづらいと遠くから眺めていると、一人の男の子がやってきて、「ちょっと来て」と腕を引っ張られる。

「この黄色いのはテントウムシ？」

指差された場所を覗き込んでみると、キュウリの葉にキイロテントウがいた。よく観察すると、うどんこ病っぽくなっている葉が少しある。この黄色いテントウムシは良い奴なんだよ、と教えてあげた。

「詳しいんだね。畑に帽子は忘れるくせに」

それが彼女と交わした本日はじめての挨拶ではない会話だった。下山さんの「お昼ごはんができたぞ」という声が、生温かい風に混じって耳に届いた。

バツタが跳ねるかのごとく、少年たちと一緒に走り出す。

## 暮らす

<http://p.booklog.jp/book/34422>

著者 : realclover

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/realclover/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/34422>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/34422>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.